保井田のお薬師さん跡

保井田のお薬師さん

7　保井田から屋代まで

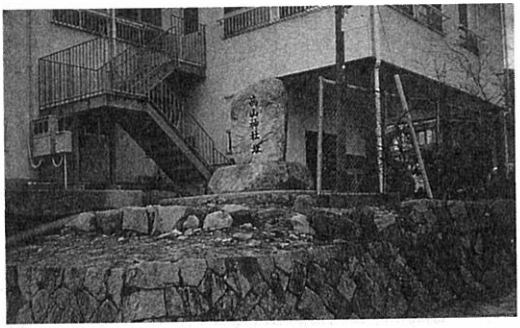
寺田から山裾を小川沿いに南下して来た古道は、その後も山裾沿いに保井田をぬけ城山へと南下していく。しかし、現在、保井田地区の古道は、八幡が丘団地・薬師が丘団地等の開発によって、まったく当時の面影は無くなっている。

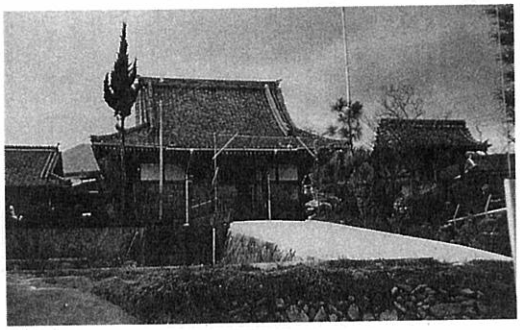
保井田のお薬師さん（正楽寺）は、八幡小学校の南側の小高い所にあり、「薬師の水は、眼病によく効く。」と地元の人々から信仰を集めている。文化十二年（一八一五）に刊行された保井田邑（むら）薬師縁起にも、「本尊の薬師如来は、行基の作でその後、空海（弘法大師）がこの寺を開き、本尊の薬師如来を開眼して正楽寺という真言宗の密教場とした。」とあるように歴史のある寺である。現在のお堂は、明治十二年に、現在薬師が丘団地になっている所から移転改築されたものである（『五日市町誌』）。その後、古道をしばらく行くと現在城山中学校が建つ城山が目に入って来る。

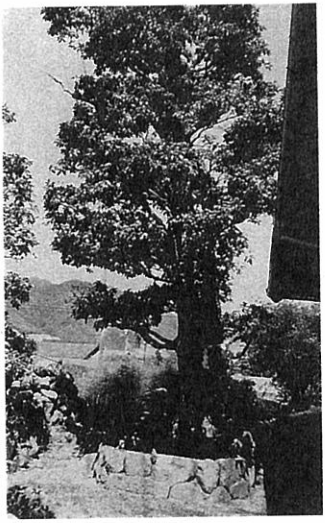
地毛（じげ）・（寺家）と八幡の境にある小山は、池田城跡である。これは、中世の城跡で、「城山」と呼ばれている。初代の城主を池田教正といい、楠木正成（の子正行（まさつら）の子）の孫に当たる人といわれている。

古道はその後、城山を迂回して正楽寺へと向うが、古道が倉重川を渡る所の人家の庭（青木孝氏宅）に「通志絵図」にでてくるサイノカミサンがある。塞の神（幸の神）とは道祖神であり、沿道の交通の安全を祈るために建てられたものである。現在、塞の神は、大きなクロガネモチの樹の中にあり、外からはわからない。というのは、小祠のそばにあったクロガネモチの樹が年ごとに大きくなり、長い年月の末小祠を壊し御神体の石を根本に包み込んでしまったからである。したがって、しめなわは、クロガネモチの樹自体に一の日・十五の日にかけられている（「五日市の地名と伝説」）。

古道をさらに進むと、現在ちびっこ広場や老人いこいの家倉重荘として使われている高山神社跡に出る。高山神社跡（一の宮）とは、もともと


高山神社跡


正楽寺


塞の神

倉重村の氏神社で、祭神の安芸津彦命は飽速玉命（あきはやたまのみこと）ともいい、安芸国開拓の祖神であるとされ、天孫降臨の時付随の神々三二神の内の天湯津彦命五世の孫に当たるといわれ、速谷神社の祭神でもある。明治四十五年六月山根原にあった天湯津彦神社（二の宮）を本社に合祀した。現在高山神社は、観音神社に合祀され、碑があるのみになっている（『五日市町誌』）。

正楽寺（旧昌楽寺）は、延暦十七年（七九八）上地宗西が、出家して空海（弘法大師）の弟子になり、倉重村片山の地に創建したものである。毛利元就の家臣で坂新五左衛門という人が出家をし円明寺の弟子となり名を玄郎と改めた。その後石山本願寺（戦国時代大阪城本丸にあった）に入り、法城守護のために戦い（石山合戦）、講和成立後、本願寺第十一代顕如上人からほうびとして阿弥陀如来の木像をもらいうけて帰り、真言宗から浄土真宗に改宗した。なお境内には、寛政年間（一七八九～一八〇一）のころの篤学の僧で特に天竺（インド）暦に詳しく大名をはじめ各地から招かれた浄名（じょうみょう）の記念碑がある（『五日市町誌』）。古道はその後正楽寺の裏手の尾根を下り、川を渡り月見城跡の下をとおって千同へと入る。千同に入った古道は、田畑の間を抜けていくが（その道は現在では、畦道になっており大人一人がやっと通れるぐらいでしかない）、しばらく行くと白鳥神社跡の空き地が見えてくる。

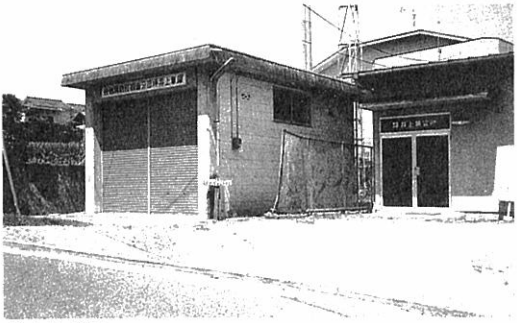
白鳥神社は、この辺では、最も古い社で、もと千同村の氏神社であった。延喜三年（九〇三）十一月、野登呂山田家の先祖清明次判が伊勢国から勧請したという。天文年間（一五三二～一五五五）の山津波で字寺尾にあった社殿が流されたので、字大方の山林を買収して切り開き再建したという。祭神は、小碓（おうす）尊（日本尊（やまとたけるのみこと））で、現在は観音神社に合祀されている（『五日市町誌』）。

白鳥神社跡から南へしばらく下ると、西広島バイパス側道に面した一角に、現在集会所や児童公園として使われている所がある。ここはかつ

長福寺

白鳥神社跡

茶店跡の井戸


苔生神社跡

て、坪井村の氏神社であった苔生（こけお）神社があった所である。苔生神社（大鉾神社）は、延喜三年（九〇三）、精明次判が勧請したといわれ、長寿の神様と一般に言われている岩長姫命を祀っている。苔生の名も長寿にあやかって名付けたものらしい。明治四十三年十一月に、一村一社という国の神社合併の勧奨に従い、千同の白鳥神社、坪井の苔生神社、三宅の武内神社・蒲神社（御曹子社）・貴船神社、屋代の工宮神社を合祀して、もとの苔生神社の境内地にまとめ四宝神社と改称した。次いで、昭和三十四年五月に、倉重の高山神社と四宝神社を合祀して、観音神社と称し今日に至っている。なお、児童公園のフェンスの下には「中子氏」と刻まれた石柱が残っている（『五日市町誌』）。

家と家との間を抜けて稲田の中をしばらく行くと右手前方に長福寺が見えてくる。長福寺は、慶長七年（一六〇二）高野山金剛峯寺の末寺である極楽寺（別格本山）の下寺として僧宗源が開基したが、その後住職が還俗したので無住の寺となって維新を迎えた。明治元年（一八六八）、神仏判然令の公布を期して本尊を返して廃寺とした。しかしその後、浄土真宗門徒の熱意により長福寺再興へと盛り上がり、真言宗から浄土真宗に改宗し、改築を施して坪井説教所を開いていた。その後正伝寺（仏護寺一二坊の一つ）の住持了厳は、正伝寺に伝わる恵信僧都作の黒体の阿弥陀如来木像を奉持して本寺に移った。しかし、明治・大正・昭和にかけて住職が長続きせず、しばらく無住となっていたが、第二次世界大戦後住職が入って寺号公称を西本願寺から許可され、今日に至っている（『五日市町誌』）。

長福寺と古道との間に、コンクリートで覆われている井戸がある。この井戸は、道を行き交う人々の喉の渇きを潤すために長福寺の前の「かげともの道」と言われている所にかつてあった茶店の跡である。現在は、その時使われた井戸のみが残って当時をしのばせている（「五日市の地名と伝説」）。

古道から小道を西広島バイパス側道へと少し下がった所に、大きな石

坪井将監の力石

任助法親王の宝篋印塔

円明寺

がある。これは、坪井將監（つぼいしょうげん）の力石と呼ばれている。坪井將監は（名は元政と言い後に和泉守といった。）、先世数代大内家の幕下に属して坪井村を領していたといわれている。將監は幼名を又右衛門といい、毛利家に属し毛利元就と陶晴賢が戦った折敷畑の合戦（厳島合戦の一年前）で戦功をあげたといわれる。また、將監は、大変に力の強い人で『芸備風土記』に「極楽寺山の坂道に大きな石があり往来のじゃまになっていたのを、又右衛門は手で自ら石をさげ一八町（約二キロメートル）の坂道を下り家の門前に置いた。」という説話が残っている。これが現在ここに残っている六五貫（約二四〇キログラム）の力石である。古道はその後、西広島バイパスを横切り三宅へと向かうが、このあたりを字円明寺原と言う。

円明寺とは、弘法大師（七七四～八三五）が極楽寺に立ち寄った際に、国家安穏祈願のためにこの地に創建した寺院で、かつては、西国一と称された寺院であったという。淳和天皇（七八六―八四〇）、五日市町誌には淳仁天皇（七三三―七六五）とある）は、三宅山の山号を記した勅額を下賜され勅願寺に指定したという。安芸守に任じられた平清盛は七堂伽藍をはじめ末寺十五坊を建立し、三宅村の地十八町歩を寺領として寄進した。その後、建保年間（一二一三～一二一八）讃岐国（香川県）善通寺誕生院から僧宥雅が来て当寺を再興したが、関が原の合戦の後入封した福島正則の寺領没収に会い無住の寺となった。明治六年（一八七三）、円明寺再興を高野山当局に訴願して許可され、正覚院（廿日市）が兼務することになった。また、境内には、任助（にんにょ）法親王（五日市町誌等には仁助法親王とあるが、「文書類従」「仁和寺御伝」にはこの字が使われている）の宝篋（ほうきょう）印塔がある。京都御室御所、仁和寺宮任助法親王は大聖院（厳島）に泊まった際、この寺にたびたび参籠（さんろう）し、山王院の号に加えて円明寺の寺号を与えた。任助法親王は天正十一年（一五八三）十一月厳島で亡くなった際、遺志により遺骸を当寺の境内に埋葬したと伝えられている（任助法親王の陵墓は大野町赤崎にもあるが、現在では赤崎の陵墓が正しいとされている）。

延命寺

武内神社

田所屋敷跡

なお、当寺は新広島八十八か所第五番の霊場になっており、宗派は真言宗である。延命寺は、円明寺の西隣にある浄土真宗の寺で、明治の初年、現在の地に開山し、明治十三年に新寺創立が許可された（『五日市町誌』）。

古道は西広島バイパスを横切り、川を渡り、田畑を抜けながら現在広島工業大学がある尾根へと向かう。現在広島工業大学の一部になっているこの辺りは字武内であり、もと三宅村の氏神社があった所で、武内神社跡と呼ばれていた。武内神社は、承久年間藤原範実が鎌倉より移り佐伯郡桜尾城主になった時に創建されたものである。祭神は、帯中津彦命（仲哀天皇）・息長帯日賣命（神功皇后）・品陀和気命（応神天皇）である。近世社家によって武内神社と称し、三宅村の氏神社であったが、明治四十三年十一月に千同・坪井・三宅・屋代の四郷社と合併し四宝神社に合祀された。現在は碑があるのみになっているが、この碑の台石は、武内神社の礎石である（『五日市町誌』）。

武内神社跡から道に沿って約二〇〇メートル登った大輝団地にはかつて田所屋敷があった。昔、安芸国の在庁官人として活躍した安芸郡府中の田所氏は、飽速玉命の後裔といわれ、もともと三宅付近に住んでいたが、始祖資隆・資遠・資俊を経て四代信職の時に、現在の安芸郡府中町石井城に移ったといわれる。代々佐西四度使・田所惣大判官代・兄部職（このこうべしき）等の職を受けており、姓を佐伯・三宅・石井と唱え、古代の職名「田所」を本姓としたものと伝えられている（『五日市町誌』）。

古道は、広島工業大学のキャンパスになっている尾根を通り屋代へと入っていくが、この尾根の先端（字岡山）に広島市立養老院の喜生園がある。この辺りを御曹子山と言うが、地元の人々は訛って「おんどうし」と呼んでいる。この山の一角に、源氏の御曹子範頼の墓と伝えられる五輪塔があり、範頼を祀っていた蒲社があった。史実によると、「源範頼は源義朝の六男で頼朝の弟に当たり、蒲冠者ともいい、兄頼朝の挙兵後、弟義経と力を合わせ平氏を討ち、平氏滅亡後も九州に留まってその経営

工宮神社跡

源範頼公の墓

に当たっていたが、義経と同じ様に頼朝によって伊豆の修善寺に幽閉され、ついに建久四年（一一九三）殺された。」となっているが、この地方の伝説では、「源範頼は九州に逃れる途中、この山の沖合まで来て暴風にあい、ついに亡くなりその遺骸を岡山に移し埋葬した。」となっている。その他に、この近くには「範頼公来るとの報せに、国司が酒樽・肴をととのえて来てみると、すでに範頼公は亡くなっていたので遺骸を埋葬したのち戻った。」ということから酒樽を引き返した所に「樽返し」の地名が残っている。また後年屋代村の浜で揖（かい）が、掘り出されたが、それはおそらく範頼公が遭難した船のものであろうということからその場所を「揖カ（揖）面」と名付けたりもしている。

源範頼公の墓（源範頼五輪の塔）と蒲神社（御曹子社）は、範頼の末裔と称する吉見正頼（津和野三本松城主）がこの地方を領した時に、建立したものと思われる。なお、蒲神社は明治まで社人もいて、祭も盛大に行われていたが、明治四十三年四宝神社に合祀され、その後社は荒れ果てて危険になったため、昭和四十七年取り壊された（『五日市町誌』）。

古道が屋代へと入った所に屋代村の氏神社であった工宮神社があった。工宮神社は、かつて、八幡宮（新宮）と工宮の二社があって、八幡宮を工宮に合祀し、八幡宮が廃されたことによって「新宮さん」とも呼ばれたものと思われる。工宮には鉄工の神が祀られ、また新宮は紀州熊野神宮より勧請された。新宮と工宮は、明治四十三年に坪井四宝神社に合祀され、さらに昭和三十五年に観音神社に合祀された。祭神は、帯中津彦命・息長帯日賣命・品陀和気命である。現在は、碑が広島工業大学のキャンパスのふもとにあるのみとなっている。屋代に入った古道は、その後、現在住宅地になっている山裾ぞいを廿日市へと向かっていく。

（河毛　樹）